

ガストン・バシュラールとラジオ

橋 爪 恵 子

序

ガストン・バシュラール (Gaston Bachelard) は二十世紀フランスにおいて、科学と詩学という異なる二つの領域で、独自の議論を展開した思想家である。彼は同時代のフランスの思想家に比べると時代から隔絶した思想家である、と思われるが、ちであるかもしれない。なぜならバシュラールの生きた時代は、フランスが二つの世界大戦を経験した激動の時代であり、サルトルを筆頭に芸術とりわけ文学が社会と積極的にかかわることを目指した時代でもあったからである。その時代にながらバシュラールの詩学は、一見すると社会からの隔離し、一人で幻想の世界に遊ぶことを推奨するように思われる。もちろんバシュラールの思想全体を俯瞰的にとらえるならば、例えば科学哲学においては当時の新しい科学理論を積極的にとりあげ、称賛していた。とはいえ芸術に関しては、現実を遊離した夢想の世界を称賛した思想家と見なされているかもしれない⁽¹⁾。

本稿では、そのようなバシュラールのラジオについての短い論考⁽²⁾を取り上げ、詩学の領域と時代のかかわりについて再考する。第一次世界大戦後、ヨーロッパ各国で民間に普及したラジオ放送に関して、バシュラールは好意的な評価を下し

ている。しかしこの論考からはそれだけでなく、芸術と社会とのかかわりに関して新たな側面を垣間見せてくれる。その点を明らかにしていこう。

第一章 芸術と孤独

まずはバシュラールの思想の大きな枠組みについて簡単にとらえつつ、バシュラールの芸術論がなぜ社会と隔絶した議論であると思われるのかを確認しよう。すでに述べたように彼は詩学と科学哲学という二つの領域を考察した。この二つの関係はどのようになっているのだろうか。バシュラールは、詩学の最初の著作『火の精神分析』で次のように述べている。

「詩と科学の軸は始めから逆である。哲学がなしうることは、詩を科学と相補的にすることであり、それらを反対命題として上手く統一することである。従って、開放的な詩的精神と無口な科学的精神を対立させなければならず」〔…〕(PFI2)

引用文では科学、詩、哲学の三者が、対立する科学と詩を哲学が統一する、という図式によって示される。ここでいわれる「詩」とは、イメージを生み出す芸術の代表として理解できる。このように科学と芸術は「対立」の構造に置かれ、これを統一するのが哲学である。そして時間論がバシュラールの唯一の形而上学であり、時間論での瞬間が科学に、持続が芸術に代表される詩的イメージに結び付けられることを考えるならば、この図式も納得できる。そのため芸術、とりわけ詩は次のような問題を論じるものとされる。

「かなり以前に書いた本の中で、熱現象に関して、科学的客観化のかなり明確な軸を記述しようとしたことがある。そ

ここで私が示したことは、幾何学と代数学が少しずつ抽象的な形式と原理をもたらし、実験が科学的な道筋へと方向付けられていく様相であった。今度私が探求しようとしているのは逆の軸——客観化の軸ではなく主観性の軸——であり「…」(PF 14)

ここで「以前に書いた本」とは、一九二八年に書かれた文学博士の副論文『物理学の一問題の発展について』である。十六年前の著作であるにもかかわらず言及されるのは、その主題が「熱現象」である点で、『火の精神分析』と関連するからである。この著作の主題が、科学的認識という「客観化」の試みであるとするならば、『火の精神分析』で主題となるイメージは「主観性」の側に属する⁽³⁾。すなわち芸術にみられる詩的イメージは、科学と対立し、主観性を問題とする領域なのである。

対立という構造に置かれることによって、芸術と科学は相反する性質を強調される。中でも芸術と社会という本論の主題にとって注目すべきは、芸術は孤独なものであるという議論である。

「それゆえ良い蠟燭の思い出の中にこそ、我々は孤独の夢を再発見するに違いない。焰は一人であり、生まれながらに一人であり、一人のままであることを望んでいる」(FC 36)

まずは簡単に、ここで引用した『蠟燭の焰』の出版の経緯を確認しよう。バシュラールは本来、火そのものの詩的イメージを論じるという大部の書物『火の詩学』を構想していた。しかし彼の健康状態もあり、一部が『蠟燭の焰』という形で出版される。したがってここでの蠟燭についての議論は、火という芸術における重要な詩的イメージの一つの特質として議論されている。

引用部において、蠟燭の焰が炉端の火などと異なる点は、我々に孤独を感じさせるところだ、とバシユラールは指摘する。炉端の火は大きく、その周りで展開される家族の営みを思わせる。しかし蠟の焰は小さく、それと対峙する人間の孤独を浮かび上がらせる。そのような孤独こそ、芸術的イメージを育む夢想家と蠟燭の炎の共通点であり、夢想家が惹かれる一因となる。すなわち「孤立した焰は、夢想家と焰を一体化する孤独の証」(FC13)なのである。

この孤独という性質が蠟燭の炎に関する詩的イメージのみでなく、芸術的イメージ全体の性質であることは、芸術が相反するとされる科学においては、逆に他者との相互理解が強調されることから確かめられるだろう。

「注意深く、情熱的な興味を持って現代物理学の活動を眺めてみると、そこには例外的なまでに正確な哲学的対話が沸き起こっているのが見て取れる。その対話は精密な器具を操る実験家と、経験を顕密な形で報告しようという野心を持つ数学者との間で交わされる。(中略)哲学学会では多くの哲学者が議論を戦わせ、物理学会では実験化や理論家が情報交換する」(RA1)

引用は、科学についての著作『適応合理論』の冒頭である。ここでバシユラールは科学の特質を哲学と比較して論じている。哲学者は同じ言葉を使いながら、実は別の話をしており、だからこそ議論になってしまふ。これに対して科学者は同じ話をしており、有益な情報を交換することが出来る、とバシユラールは指摘する。このように実験と理論という異なった方法を使いながらも、互いに理解し協力できるのが科学者の集団の特徴だとバシユラールは考えていた。そして、この関係は理論家と実験家の間にとどまらない。科学理論においては、それが正しいものであるならばどんなに独創的なものであろうとも結果的には多くの人に受け入れられるものになっていく。そのようにして共有された理論を土台に、また新しい理論が生まれ、それが正しい物であれば、また受け入れられる。このように他者との相互理解と理論の共有が科学の基本であり、個人

的なものになりがちな芸術的イメージとの違いであるとバシュラールは考えていた。

以上のように科学と芸術は、相反するものとして議論され、芸術は孤独に、科学は多くの人間との相互理解のもとに成り立っている、とされる。このような構図で論じられるバシュラールの詩学が、芸術について社会からの孤立を推奨すると結論付けられてもやむをえないだろう。また芸術論そのものの特質に加えて、実際にバシュラールの詩学では、ポーやホフマンなどの幻想的な文学が評価され、例として取り上げられる。すなわち現実離れた話を、一人孤独に鑑賞する夢想者が主題となる。その場合、同時代のサルトルに代表されるような、社会参加を積極的に打ち出した芸術論と比べるならば、社会的な孤立を推奨する議論と言われてもしかたないかもしれない。

しかしバシュラールの詩学はそれにとどまるものではない。その点をラジオという主題を通して明らかにしていこう。

第二章 ラジオと芸術

初めにラジオがバシュラールの思想の中でどのように位置づけられるかを見ていこう。その手掛かりとなるのは以下の文である。

「ラジオは、まったく宇宙的な問題である」(DR 216)

ラジオを主題とした短い論文は、以下のような文章から始まる。ここでの「宇宙的」とは何を意味するのか、この論文では述べられないが、一九三一年に発表された「宇宙と実在」という論文では次のように述べられている。

「実際、私は料理をしているときには思考しない。(中略) 私が料理をやめ、近点を見つめるのを止めたとき、私は気晴らしをしてきたような印象を受ける。すなわち私の精神が徐々にバカンスへと出かけ、すこしずつ、夢想が―これは瞑想と対立するものである―その権利を取り戻す。その時、私個人の場合、これは普通ではないと思うが、宇宙という概念が対象という概念と対立するものとして表れる。この(宇宙)という概念は、私にとっては、対象化することが緩んだときに表れるものである。私の客観的な態度が弱まれば弱まるほど、世界は広がっていく。宇宙は私の不注意で無限つなぐ」(ERA 103-4)

一九三一年は、バシュアールが科学哲学のみを論じ、詩は論じていない時期である。ここでバシュアールは、「宇宙」という概念について考えたことはない、と言いつつしながらも哲学協会リヨン支部 (la Société Lyonnaise de Philosophie) の求めに応じて、この概念について「自分の驚き、自分の困惑を告白する」ことで議論を変えたい、とする。その中で宇宙という概念をこれまで科学哲学で論じてきた「対象」に対立するものと位置づけ、私が科学的認識を目指して「思考」していないときに初めて「宇宙」として現れる、と指摘している。すなわちここでは宇宙は、科学と対をなすもの、つまり芸術と同じ位置を与えられている⁽⁴⁾。したがって「宇宙的」といわれるラジオも芸術の領域に位置づけられる⁽⁵⁾。

以上のようにバシュアールにとって、ラジオは「宇宙」すなわち夢想の領域にかかわるものであったが、この分類は一見すると特異なものに思われる。ラジオは当時の科学的進歩の象徴である。科学哲学と詩学の両分野を論じてきたバシュアールが、なぜラジオを科学ではなく詩学に関わるものとして、論じたのだろうか。

その理由として、バシュアールの議論において科学哲学と詩学の対立が五感と結びついている点が挙げられる。視覚が古代から対象と観察者の分離を可能にし、客観的認識をもたらすものとされていたが、バシュアールもこの考えを引き継ぎ、認識論で既に次のように述べている。

「物理学者はさらに図式化と簡略化を行う。彼は実験を視覚的な比較に還元しようとする。事実、我々の一切の感覚のうちで最も確実、最も迅速、最も精密、かつ最も実証的なのは視覚である。他の感覚はこれに比べると主観的である」

(EA58)

ここでは科学がいかにして現実を「形式」の中に当てはめていくか、が問題となっている。それは図式化することと簡略化することによってなされる。なぜならこれによって感覚的なものを「視覚化」できるからである。したがって視覚化は、科学の重要な方法であり、視覚は「全ての感覚がこれに比べると主観的」であるような客観的な感官とみなされる。この考えを詩学以前に既持っていたバシュラールが、主観性の考察を目指した芸術で、視覚以外の刺激を重視したことは自然なことといえる。

このように明確に客観に位置づけられる視覚に対して、視覚と共に客観的認識に寄与するといわれることの多い聴覚については事情が異なっている。バシュラールは音が生み出す芸術的イメージについて、とりわけ詩における発音とイメージのかかわりについて言及する。そのとき音は、イメージを生み出すものとして、芸術の重要な要素として論じられる。例えば言葉の響きとそれが呼び起こすイメージについて次のように述べられている。

「書きながら人は言葉の中に内的な響きを発見する。二重母音はペンの下で分離して響き、人はそれを別々の音において聞く。それは苦しみだろうか？それとも新しい悦楽であろうか？言葉の中心に母音の衝突を滑り込ませて詩人が発見する、苦しみの歓喜を誰か私たちに伝えてくれないものだろうか。半句ごとに母音の葛藤があるマラルメの詩句の苦しみを聞いてみよう。

「肉体の中で泣くダイヤモンドの声を聞くために」

その名前がもろさを示しているダイヤモンドは三つのかけらになりそうである」(PR 44-5)

ここでは二重母音の問題が取り上げられている。二重母音は母音の葛藤であり、苦しみであると共に新しい悦楽であり、歓喜である。そしてバシュラールはマラルメの詩句を示す。そこには *ouir* (聞く) *le diamant* (ダイヤモンド) という二つの二重母音が悲しみ、苦しさを感じさせる。そして *le diamant* (ダイヤモンド) の持つディ・ア・モンという三つの音節がダイヤモンドに砕けてしまいそうなるもろさを与えている。

以上のようにバシュラールは一貫して音声の問題を詩的イメージと関連付けていた⁽⁶⁾。そのとき着目されるのは、発音しようとする身体の動きや口蓋の感覚である。すなわち聴覚的要素は芸術と論じられるときは、身体と深く結びついた形で論じられている。だからこそバシュラールは次のように言う。

「したがって我々に言わせれば、詩的活動には一種の条件反射、奇妙な反射が存在する。なぜならそれには三つの根があるからだ。つまりそれは視覚的印象、聴覚的印象、発声的印象を統合している。(中略) 声が映像を投影する。唇と歯は別々の光景を生み出す。拳と顎で構想される光景がある。……発音するのに実に容易で、実に柔らかく、実に心地よい唇形の光景がある」(ER 255-6)

言葉の発生が生み出す音、およびそれに伴う身体的な動きから視覚的なものが生まれることをバシュラールは「視覚的印象、聴覚的印象、発声的印象の統合」という。詩的イメージは視覚から生まれるように見えるが、実は身体的な経験や触覚経験に基づいている。言葉は、目で見、イメージを脳裏に思い浮かべるだけではない。声を出して発生し、筋肉の動きを感じ、その音を聞くことによって作られるイメージもある。バシュラールは、「グラジオラス (*glaiell*)」が実際は水辺で見かける

ことが少ないにも関わらず、しばしば水と結びつけられるのは、その言葉が持つ音と、その音を発音するときの唇の動きが原因であることを指摘している (ER 255-6)。

このように聴覚が芸術と関連付けられることによって、耳で聞くラジオもまた芸術に位置づけられる。だからこそラジオは「宇宙的」と言われる。そしてラジオが芸術の領域と見なされるならば、芸術と同様、ラジオにおいても聞く者の「孤独」が強調される。

「本は、時に閉じられ、時に開かれる。本は人を孤独のうちに見出したり、人に孤独を課したりはしない。反対にラジオは確かに人に孤独を課す」(DR 222)

読書は一人で読んでいたとしても、自分の決断で始めたりやめたりすることが出来る。しかしラジオは時間に合わせて一人で耳を傾けなければいけない、とバシュラールは言う⁽⁷⁾。すなわちバシュラールの芸術論の中心をなす文学との比較においてさえ、ラジオは孤独な楽しみであると位置づけられるのである。以上の記述は、必ずしもラジオの通常の効き方でありのままに記したものではないだろう。ラジオはしばしば、大勢の人間によって視聴され、ダンスホールなどでは他者とのコミュニケーションに寄与することはバシュラールも指摘しているからである。それにも関わらず、ラジオの聴取者は本質においては孤独であるとバシュラールは断定する。それは芸術が孤独なものであり、同時にラジオが芸術の典型的性質を持つとされているからである。

第三章 ラジオと他者

以上のようにラジオと結びついた聴覚は、詩学における重要な感官とみなされ、それゆえにラジオは孤独に関わるものとされた。この議論を見る限りでは、ラジオに関する議論もまた、バシュラルの芸術論を社会との孤立に結びつけることに妥当性を付与するように思われるだろう。しかし、ラジオに関する記述には、それにとどまらない箇所が見て取れる。なぜならラジオをめぐる小論では、科学と同じく他者と分かれ合うという要素も指摘されるからである。例えばバシュラルはラジオを十八世紀のカフェと比較して次のように言う。

「十八世紀の末までは、カフェでの会話が話題となっていた。それはひどく騒然としており、カフェの一隅で話していることが、向こうの一隅では聞こえなかった。だが、ラジオによって状況を呈している宇宙的な領域では、万人が理解しあい、万人が安らかに耳を傾けあうことができる」(DR 217)

この引用では、カフェの話し声とラジオの声の類似性が指摘されたうえで、ラジオの方がより万人に「耳を傾けあう」とされる。カフェでは遠くのざわめきは良く聞こえない。それに対しラジオではどんなに離れていても、はっきりと言葉を聞きわたることができる。だからこそ、ラジオでは「万人が理解し合う」ことが出来るのである。このようにバシュラルが言うとき、ラジオが孤独であるという先の議論と同じく、必ずしも正確な実態を考察したわけではないだろう。当然ながら、カフェにおいても遠くの話が聞こえることもあれば、ラジオの音がよく聞こえないこともありえるからである。とりわけ、当時のラジオの性能を考えるならば、雑音が入ることは十分にあり得ただろう。

それにもかかわらずバシュラルはラジオが万人に理解されるという点を指摘する。その時にバシュラルが注目するの

は、単に声が聞こえるというだけでなく、電波によって世界中とつながること、そしてその電波を発見したのは論理である、ということである。

「観念論者は、精神の領域、すなわち思考の圏について語った。人々は、成層圏について、電離層について語る。ラジオは幸いにして、この電離した層の恩恵に属している。全世界的なこの言語に適した語は何であろうか。それはロゴス圏である」(DR 216)

バシュラルは観念論者の語る議論は精神圏すなわち知的思考の世界であると述べ、それに対してラジオは電離層のものという。電離層とは、電子やイオンが電離した状態で存在する領域であり、この層で電波が反射することによりラジオは、より遠くの音声を受信することが出来るようになる⁽⁸⁾。実際は、ラジオ放送において主流となるのは、よりはっきりと聞こえる地上波による通信だが、バシュラルはあえてラジオにおける電離層の存在を重視する。それは電離層における反射がより遠方までとき、より多く人との情報交換を可能にするからである。もっとも、電離層がどんなに遠くの音声伝えたとしても、「全世界」に届くことは難しい。それにも関わらず、バシュラルがラジオの「全世界的言語」について語るのは、電離層の働きがロゴス、すなわち論理に基づいているからである。

この議論は芸術というよりも科学の領域での主張に近い。バシュラルは科学的理論がすべての人々が理解できる理由として、厳密な定義と論理に基づく点を指摘していた。同様にラジオにおいても、論理によって伝達可能になった音声が多くの人々の共通理解に寄与する。この点では、ラジオは科学抜きには存在しなかったことをバシュラルも認めているといえよう。しかしだからと言って彼はラジオと科学の世界をただちに結び付けない。先のカフエの引用にすぐに続けて、次のように言うからである。

「人間の精神の完全な実現。したがって根底、すなわち無意識の諸原理の方にまで行かねばならぬ」(DR 217)

ロゴスという全世界的な言語によって、万人が理解し合うのは人間の精神の実現である、とバシュラールは言う。そしてこのような万人の理解には根底、すなわち無意識の領域へと関わる必要がある、と指摘する。

この部分はバシュラールの詩学の議論を踏まえる必要があるだろう。実は彼の詩的イメージに関する議論においても、科学とは異なる形ではあるが、他者との理解という論点が存在する。それは詩的イメージを生み出す無意識という議論である。詩的イメージの根底には、無意識の力があるとバシュラールは指摘する。バシュラールの無意識とはユングの集団的無意識に影響を受け、時代や場所を問わない人類が共有する無意識である。その点では、イメージもまた、孤独でありながら万人に通じる性質を持つのである⁽⁹⁾。

ただし、このような無意識の領域を通じた詩的イメージにおける他者との理解は、科学におけるものと違いがある。詩学においては、夢想者は共通の無意識から力を得ながらも、最終的には孤独なイメージ、すなわち独自のイメージを作り出す。逆に科学においては、孤独を出発点として他者との理解へと進んでいく⁽¹⁰⁾。したがって芸術の領域であるラジオにおいても、万人に共有されたイメージを出発点としながら、それをもとに孤独を作り出すことが最終的に推奨される。

「聴取者は受信機を前にしている。彼はまだ作り上げられていない孤独の中にいる。やがてラジオが、彼のモノではなく、万人のモノであるイメージの周り、人間的で、あらゆる人間の精神現象の中にあるイメージの周りに孤独を構成しに訪れる」(DR 222)

聴取者は、一人ラジオを前にする。そこでラジオは万人のモノであるようなイメージ、無意識に訴えかけるようなイメージ

を伝える。しかしそれだけにとどまらない。ラジオの聴取者はそこから、孤独なイメージ、すなわち聞く人個人の独自のイメージを生み出していく。したがってラジオが「世界共通の言語」に基盤を持つことは、「孤独」なイメージを生みだすために必要なのである。この議論は、バシュラールの詩学が社会と隔絶したものである、という批判に対する一定の留保となる。すなわち孤独を推奨する芸術論においても、その前提には無意識による他者との理解が前提とされるのである。

もっとも最終的に芸術が孤独なもの、すなわち独自のイメージを生み出すのであれば、たとえ無意識による他者との理解が前提とされていたとしても、社会からの孤立を推奨するとされるのもやむを得ないかもしれない。しかしラジオに関する議論は、もう一つ別の点で、芸術と社会の関係について示唆を与える。それは既にのべた科学と芸術が「対立」という関係についてである。

確かに詩学を論じ始めた当初、バシュラールは芸術と科学と対立するものとしてとらえるが、実は晩年の議論では多少ニュアンスが変わっている。例えば次の文章は、『蠟燭の焰』からの引用である。

「私が落ち着いて仕事ができるようになったのは、私の執筆生活を一つは概念のもとにあり、もう一つはイメージの星の元にある、ほとんど独立した二つの分野にきちんと区切ってからのことであった」(FPE33)

この引用文では「概念の元にある分野」とは科学哲学のことであり、「イメージの分野」は詩学を指す。この二つが区別されるのが「私が落ち着いて仕事が出る」ために必要だった、とバシュラールは振り返る。この「区別」される時期がいつからなのか、はっきりしたことは述べられていないが、科学とイメージが「対立」ではなく「区別された領域」であることをバシュラールは強調するようになるのである。

とはいえ芸術が孤独なものでありつづけるならば、科学と芸術が「対立」であっても「区別」であっても、バシュラール

の詩学を社会から隔離したものであるという批判は変わらないだろう。すでに述べたように、科学の領域が他者との相互理解という社会と結びつく要素を持っているとするならば、芸術と科学が「対立」的な関係ではなく、むしろ「区別」であった方が、芸術が社会と隔絶する、というニュアンスはより強まるかもしれない。しかし科学と芸術を「区別された領域」と見なすことは、両者を関係ないものとみなすことではない。特に注目したいのは、バシュラルがラジオについて、もし孤独な営みであれば、それは必要ないものではないか、ということに反論する次の文章である。

「でも一体」とある人たちは言うだろう。「それは誰の役に立つのか」もちろん、それを必要としている人達に、である。

(中略) ラジオは不幸な魂、暗鬱な魂に夜を告げてやらなければならない。「重要なのは、地上で眠ったりしないこと。

キミが選ぼうとしている夜の世界に戻っていくことだ」(DR 223)

これはラジオに関する論の最後に当たる部分である。バシュラルはラジオが一人孤独に楽しむ娯楽ならば、必要ないのではないか、という指摘に反論する形で論を締めくくる。彼によれば、ラジオが我々にとって必要なのは、それが他者と全く関係しないからである。バシュラルはラジオを「夜の世界」に位置づける。それは眠る時間であり、休息する時間である。その時は、昼間のことを引きずるよりも、きっぱりと忘れることが求められ、その結果、よく眠ることが出来るならば、次の日、よりよく活動できる。このように夜の世界は、むしろ関わらないことによって昼にとって重要となる。

実はこのような活動と休息の関係は、初期のころからすでになされていた。バシュラルは時間を論じた初期の議論で次のように述べている。

「生きられる、活動的で創造な持続のまさにその中に、根本的な異質性が存在し、時間を十分に認識して活用するため

には、創造と破壊のリズム、制作と休息のリズムをうまく働かせなければならないことがわかるだろう。ただ怠惰だけでは、同質的である。それを繰り返し征服することによって初めて、それを守ることができ、繰り返し獲得することによって初めて、それを保つことができる」(DD8・9)

バシュラールはベルクソンを批判して、時間の本質を瞬間であると主張する。それは瞬間という孤立した一瞬をつなぎ合わせることで、時間の創造性を論じることが出来るからである⁽¹⁾。そしてバシュラールはその瞬間が、互いに「異質」なものであることを強調する。同じ瞬間が連続してもそこに創造性はない。創造と破壊、活動と休息という正反対の瞬間が隣接するときにこそ、時間は互いに活性化する。休息だけでは「怠惰」となるが、活動だけでは「それを守ること」はできない。ラジオも先の引用にある様に、夜の睡眠、すなわち「休息」と結びつけられていた。そしてラジオが芸術の領域であるならば、それは芸術の性質でもあるだろう。その時、芸術と区別される科学は、昼の領域、すなわち他者と理解し合う時間と見なされる。このように考えるならば、孤独なラジオと他者との理解が求められる活動の關係に、別の側面が浮かび上がってくる。すなわちそれぞれが異なり、はっきりと区分されることによって、両者が関わらないのではなく逆に発展していくような關係である。このラジオに関する記述から、バシュラールが晩年に芸術と科学を対立ではなく区分とらえた時、どのような關係を理想としていたかを理解することが出来るだろう。区別されることで、両者がよりよくなる關係、このようなものとして科学と芸術はとらえられているのである⁽²⁾。

またそのように考えるならば、振り返ってバシュラールの詩学が社会から隔絶したものととらえられていることにも、新たな光が当たる。確かに芸術は社会と隔絶する。むしろ積極的に隔絶しなければならぬだろう。しかしそれは芸術が他者の理解と全く關係がないということを意味しない。夜に幻想の世界を孤独に楽しむこと、ゆっくりと一人休息することが、昼に他者と理解し合うための活力となるような關係をバシュラールが理想としていたとするならば、サルトルのアンガージュ

マンのように積極的な社会参画を促す芸術論とは異なるかもしれないが、別の意味で芸術が社会に益する方法なのではないだろうか。

結語

本論文では、ガストン・バシュラールのラジオに関する言及を考察した。バシュラール詩学はしばしば、社会と隔絶したものとと言われる。確かにバシュラールの芸術に関する議論は、幻想的な文学を孤独に楽しむ夢想者が典型とされており、積極的な社会参画を促すものではない。しかし本稿では、バシュラールのラジオの理論を取り上げること、彼の芸術論との社会とのかかわりを再考した。

ラジオも芸術の領域に属するものとして、その「孤独」が強調される。しかし二つの点において、ラジオは他者との理解にかかわるとされる。第一に、遠くの音声を伝達可能にする電離層の重視であり、第二に、ラジオが属するとされる夜の世界での「休息」が他者との理解につながる昼の世界の活動の活力になる、という指摘である。この二つの論点は共に芸術が「孤独」であることを否定するわけではない。なぜなら無意識におけるイメージの共有は、のちに独創的なイメージを個人が作り出すための土台として機能し、休息においては昼の世界をきっぱりと忘れされることが推奨されるからである。しかしこの二つの側面は共に、ラジオが他者の理解と関わる可能性を示唆している。とりわけ、第二の場合には、夜の休息と昼の活動は、きっぱりと区別されるがゆえに、かえって益する関係が示される。同様の関係がラジオのみならず、芸術全体にも妥当するならば、孤独で独創的なイメージを夢想する芸術の時間が、他者との相互理解を目指す昼の活動を邪魔するのではなく、それに寄与する可能性が示唆されるのではないだろうか。

凡例

本文中に引用した著作の略号は以下の通り。なお引用文の訳は筆者によるものだが、既訳のある場合には参考にさせていた。

Gaston Bachelard

NES : *Le nouvel esprit scientifique*, P.U.F., 1999 (1934^{1re}).

『新しい科学的精神』関根克彦訳、筑摩書房、二〇〇二年（一九七六年初版）。

PF : *La psychanalyse du feu*, Gallimard, 2002 (1938^{1re}).

『火の精神分析』前田耕作訳、せりか書房、一九九九年（一九七四年初版）。

ER : *L'eau et les rêves*, José Corti, 1997 (1942^{1re}).

『水と夢』小浜俊郎、桜木泰行訳、国文社、一九六九年。

『水と夢』及川馥訳、法政大学出版局、二〇〇八年。

PE : *La poésie de l'espace*, P.U.F., 2001 (1957^{1re}).

『空間の詩学』岩村行雄訳、筑摩書房、二〇〇二年（一九六九年初版）。

FC : *La flamme d'une chandelle*, P.U.F., 1996 (1961^{1re}).

『蠟燭の焰』洪沢孝輔訳、現代思想社、一九九三年（一九六六年初版）。

DR : *Le droit de rêver*, P.U.F., 2001 (1970^{1re}).

『夢見る権利』洪沢孝輔訳、筑摩書房、一九九九年（一九八七年初版）。

ERA : *L'engagement rationaliste*, P.U.F., 1972.

Marie-Pierre Lassus “L’imaginaire sonore et ses effets de vie” in *Sciences, imaginaire, représentation : le bachelardisme aujourd’hui*, *Cahier Gaston Bachelard*, sous la direction de Pierre Guenancia, Maryvonne Perrot et Jean-Jacques Wunenburger, 2012, Centre Georges Chevrier.

註

- (1) ただいくつかの論では、バシュラルの詩学が必ずしも社会と隔絶したものではないことは指摘されている。例えば、Kaplan はバシュラルがブーバーに寄せた賛辞を手掛かりに、バシュラルの詩学における創造と現実の交錯を「反響 (résonances)」という概念を使いつつ論じている。(“Imagination and Ethics : Gaston Bachelard and Martin Buber” *International Studies in Philosophy*, 35:1, 2003, pp75-88)
- (2) “Rêverie et radio” in *Le droit de rêver*, P.U.F., 2001 (1970^{1re}).
- (3) ここで「客観化」と「主観性」という言葉遣いがされていることに注意したい。客観はそれに到達する努力をして徐々に達成されていくのに対し、主観は人間の自然な認識と結びついているというバシュラルの考えがここから読み取れる。
- (4) 「宇宙」が芸術の領域に属するという主張は、バシュラルの生涯を通じて変化しなかった。この点は、晩年に発表された芸術論『夢想の詩学』で「夢想と宇宙」という一章を設けてそれについて述べている事からもわかる。
- (5) ラジオについての唯一の短い論文が、「夢想とラジオ」であり、夢想が一貫して芸術に属する態度であったことからそれが分かる。
- (6) ラジオがもつばら音声で情報を伝えるにもかかわらず、バシュラルは一貫してラジオの「イメージ」について語る

原因もここにある。すなわち文学を中心とした詩的イメージの議論において既に聴覚の問題が語られているからこそ、音声のみのラジオであってもそこから生まれるイメージをバシユラールは重視した。

(7) ラジオにおける孤独は、否定的な要素ではない。逆に孤独は聴取者が独創的なイメージを受け取ることを可能にする。だからこそ「ラジオは独創性を職務とする。そこでは繰り返しは許されない」(DR 217)と言われるのである。

(8) 電離層における電波の反射は、昼間よりも夜間により活発に発生する。夜になると遠くの地域のラジオ放送が聞こえるようになる、というのもこの現象に由来する。のちに見るようにバシユラールがラジオを夜と関連付ける一因には、電離層のこの性質も寄与している可能性がある。

(9) 同様に、科学においても孤独についての言及は存在する。それは、新しい理論を思いついた科学者の孤独である。バシユラールはアインシュタインを名指しつつ、彼が新しい理論を発見した時には「科学者の共同体」を抜け出て孤独であったことを指摘している (RA 49)。

(10) 先のアインシュタインの例においても、新しい理論を思いついた瞬間は孤独であるが、それが徐々に理解されることによって、共同体に理解されていく。この点では、科学と芸術は、それぞれが孤独の要素と他者理解の要素を持ちつつも、やはり対比的な領域として考えられている。

(11) バシユラールはこのような瞬間に関しても「孤独」であると指摘する (II 13)。

(12) この関係は、詩学における無意識と独創的イメージの関係にも当てはまる。すなわち、他者と理解しあえる無意識的イメージは、夢想者が作り出す独創的なイメージの邪魔になるのではなく、無意識的イメージが存在するからこそ他の異なるイメージを生み出すことが出来るのである。